

◆花のお江戸から駿河へ

徳川家康天下取りの王手は、伏見城入城だといわれます。

豊臣秀吉の時代に最も権威のあった城は、大阪城ではなく伏見城でした。なぜなら大阪城は豊臣氏の「私の城」、かたや伏見城こそが「公の城」だったからです。城は、単に大名の威光を示す箱物ではなく、力と意思を周囲に顕示する重要な意味を持っていました。

家康が1598年に伏見城に入城し事実上の主となったことは、天下の公権も同時に手にしたことを他の大名や朝廷に認めさせることになったのです。もし、前田利家がその時に生存していたら、利家の天下になつた可能性は非常に大きかったといわれています。

その後、1603年に家康は江戸幕府を開きます。そして、1607年には駿府城を大改修して自らの本拠地としました。現在の静岡市葵区にあり、静岡城とも呼ばれる駿府城は、75歳で胃がんのため亡くなった家康の最期をも看取りました。

しかし、華やかな江戸を捨て、なぜ駿府のような田舎に...? この疑問の答えは、縁起のいい初夢として知られる「一富士、二鷹、三ナスビ」のことわざにあります。

◆節約家も手を伸ばす高級食材

諸説ありますが、ある側室から駿府城に移り住んだわけを聞かれた家康はこのように答えたとか。

「富士ほどすばらしい山は近隣の国にもない。また、鷹を使つての鷹狩りは運動にもなり世の中の偵察もできる。他所より早く食べられるナスは、美味この上もない」

あるいは、当時ナスがあまりに高価だったため、「一番「高い」(山)のは富士、二番目は愛鷹山、そして三番目がナスである」と口にしたとも伝えられます。

たしかに、家康は駿府のナスを好んで食していました。特徴あるまん丸の形を成し、静岡の折戸で栽培されたことから折戸ナスと呼ばれ、毎年家康に献上されたとのこと。このことわざの出処が家康だということも納得できます。

ナスは、インド原産といわれ、中国を経て

日本に伝わってきました。750年に東大寺の正倉院に献上されたという最古の記録が残っており、当時は「奈良比」、または「奈須比」と表記されていました。江戸時代に入るとキュウリなどともに広く普及していきましたが、折戸や三保では促成栽培(温室や温床などを使って作物の収穫時期を早めること)が行われ、商品価値を高めたために、賄賂として使われたともいわれますから、縁起が良い夢として三番目にナスが挙がったのも合点がいきます。

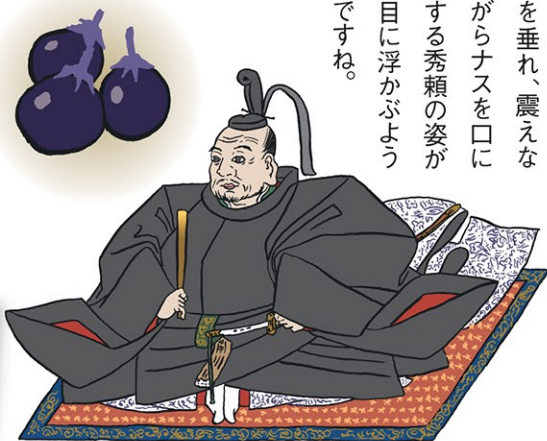
◆愛した野菜こそが長寿の秘密?

ナスは90%が水分ですが、独特の黒紫の皮にはアントシアニン、つまりポリフェノールが豊富です。抗酸化作用、老化防止、がんの抑制、コレステロールの安定化などに適した栄養素です。薬がない時代にはナスのヘタの部分(黒焼き)にして塩を混ぜ歯周炎予防に、ヘタの切り口をイボにあててはイボ取りとして重宝がられました。

1607年、家康は改築した駿府城に豊臣秀頼を呼びつけ挨拶をさせています。これが家康を天下人として知らしめる決定

打となりました。そのとき秀頼は、折戸ナスを食べたのでしょうか...

秀吉亡き後、この偉大な人物の前で頭を垂れ、震えながらナスを口にする秀頼の姿が目につかぶようですね。



うんだみつゑ 植田美津恵

医学博士・医学ジャーナリスト。首都医校(東京)教授。愛知医科大学医学部客員研究員、日本末病システム学会評議員、日本思春期学会理事。著書に『江戸健康学』『戦国武将の健康術』など。近著『忍者ダイエット』も好評発売中。

